

血のつながらない義妹と、二人きりの夏休み――
親が旅行で、家に二人だけになった夜から――

親の再婚で出会った、血のつながらない義妹。義妹という建前が溶けていく、ひと夏の
純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

結城葵ゆうきあおいのことを、親戚も近所の人も、みんな「しつかりした子」だと言う。

物静かで、品があつて、二十歳とは思えないほど落ち着いている——義理の妹は、いつもそういう顔をしている。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

夏の夜のぬるい闇が、部屋の隅々まで満ちていた。窓の外では、まだ蟬時雨の名残のような熱が、夜気にこもっている。エアコンの低い唸りと、二人の乱れた呼吸だけが、暗い寝室にあつた。常夜灯のほのかな橙だいだいが、汗ばんだ白い肩を、淡くなぞっている。

昼間の葵を思い浮かべる。朝、台所で麦茶のポットを冷蔵庫にしまいながら「颯さん、今日は何時に帰るの」と、淡々と訊いてくる横顔。来客があれば、背筋を伸ばして品よく頭を下げ、誰に対しても一歩引いた丁寧さを崩さない。大学の友人といるときも、感情をあまり表に出さない、静かな女性。それが、みんなの知っている「結城さんの娘さん」だ。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

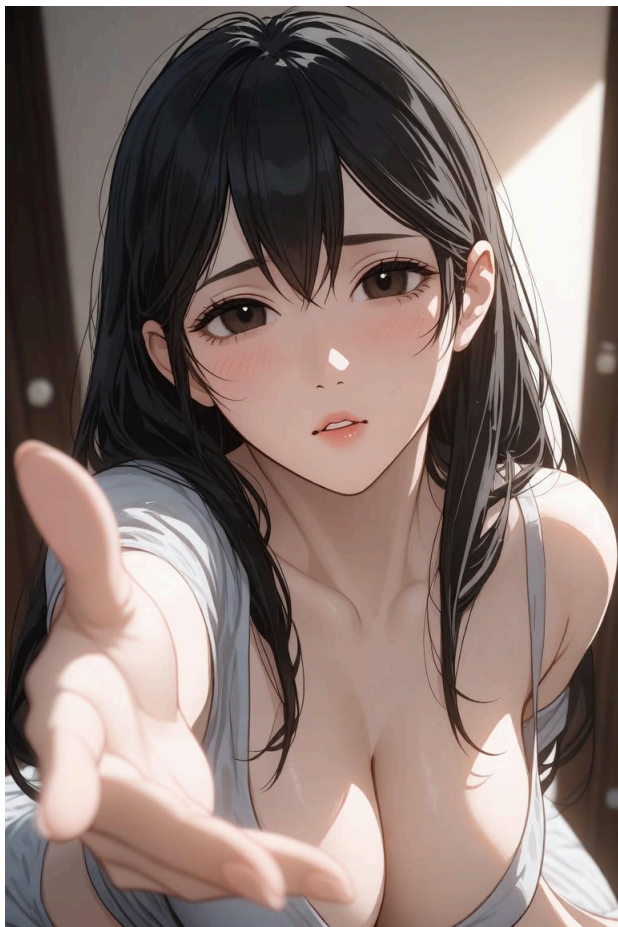
「……颯さん」

艶のある黒髪が、汗で白い首筋に幾筋も貼りついていた。いつもは涼しげに伏せられている切れ長の目もとが、今は潤んで、まっすぐにこちらを見上げてくる。その視線に、ふだんの落ち着きはない。ただ一人の女の、剥き出しの熱だけがあった。

俺たちは、血のつながった兄妹ではない。

親の再婚で、戸籍の上だけ「兄妹」になった。それまでは、互いの存在すら知らなかった、赤の他人同士だ。同じ名字を名乗り、同じ家で暮らしてはいても、二人のあいだに流れているものは、最初から「家族」という言葉では呼びきれなかった。

それでも——この一線を越えてはいけない、とずっと思ってきた。建前でも、俺たちは「兄」と「妹」だ。親が築いた新しい家庭を、自分の手で壊すわけにはいかない。そう自分に言い聞かせて、見ないふりをしてきた熱が、今、この夜にほどけてしまっている。



——ここから先は製品版でお楽しみください——